インスリン依存型糖尿病小児の身長発育

都立清瀬小児病院　土屋　裕

同化ホルモンとしても重要な働きを有するインスリンの絶対的乃至相対的欠乏状態である糖尿病患児では，発育，発達が障害され得ることは想像に難くないところである。

32症例の糖尿病患児につき，この点に検討を試みた結果は下記の如くである。

身長発育の評価法　：　昭和45年度本邦全国統計より作製した７本の標準パーセンタイル曲線を有する図表（３，10，25，50，75，90，97 th percentile）を用いて，糖尿病発症前，後の患児の発育パターンを比較する longitudinal method により，糖尿病が患児の身長発育に及ぼす影響を観察した。(評価法の詳細については小児内科　10；503，昭53，参照)

症　例　：　小児糖尿病患児32例（男児11歳以前，女児９歳以前）で，且つ，平均7.5年）を以下の３群に分けた。

１群；糖尿病発症８歳以前の10症例。１群としての観察は思春期前迄で打ち切っている。１群の症例で思春期以後迄観察し得たものは，３群に重復して含まれている。

２群；糖尿病発症が思春期近辺又はそれ以後の10症例。

３群；糖尿病の発症が思春期以前（男児11歳以前，女児９歳以前）で，宜，糖尿病患児として思春期を経過した８症例。１群のうち思春期を経過したものは，重復して３群にも含まれている。

結　果　：　糖尿病発症迄は全例，各々の growth channel に従った正常発育パターンを示していた。

１群；１群に属する期間は（思春期迄は）全例，糖尿病発症後も自個の growth channel から１channel 以上ずれることなく，正常の発育パターンを維持していた。因に，身長は平均56 th percentile (25～90) であった。糖尿病のコントロール状態は12例が good 又は fair，７例が poor 又は bad であった。

１群の症例の骨年齢は歴年齢に比してやや遅れている症例が多かったが，その歴年齢と骨年齢のずれは±２ＳＤ以内であった。骨年齢と身長年齢を対比させると，骨年齢の遅れは，歴年齢との対比の場合よりやや拡大されていた。

２群；身長発育に関しては１群と同様であった。身長は平均40.5 th percentile (10～97) であった。コントロールの状態は good 又は fair　９例，poor　１例であった。

２群患児の骨年齢は，骨年齢／歴年齢を中心に上下に均等に分布し，すべて２ＳＤ以内に納まっていた。

3群；1及び2群と異なり，8例中6例が発症前の自己の growth channel から，糖尿病発症後，2 channel以上下方（低身長方向）にずれて発育していた。これ等思春期の身長スパートの遅延が見られた症例の身長は3～25 th percentile の間にあり，糖尿病発症前の growth channel に従って思春期を経過した2症例は，それぞれ50及び80 th percentile であった。糖尿病コントロールの状態はスパートの遅れた6例で fair 1例，poor 又は bad 5例であった。一方，正常の思春期のスパートを示した2症例のコントロールは fair，bad 各1例ずつであった。

骨年齢/歴年齢は＜1，1＜の症例がほぼ同様であったが，骨年齢/身長年齢では＜1の症例が1≦の症例の約3倍見られた。経時的に骨年齢を追跡した症例では骨年齢/身長年齢が徐々に増加して行く場合が多かった。

小　括　：　糖尿病が思春期以後に発症した場合，或いは思春期以前に発症しても思春期迄の間は，患児の身長発育が糖尿病のために大きく障害されることはないようであるが，糖尿病患児として思春期を迎えた場合には，思春期のスパートは遅延する傾向が窺えた。これが患児の最終身長に何等の影響をもたらすかについては今後の検討が必要と思われるが，骨年齢との関係からみると，このような症例では最終身長にも影響は残るように思われる。

北海道における若年性糖尿病の現状

北海道大学医学部小児科　　松浦　信夫
福島　直樹
阿部　和男

1973年，北海道において第1回小児糖尿病サマーキャンプが開催されたのを機会に，北海道におけるインスリン依存性若年性糖尿病の調査を行なって来た。本研究班の初年度の目的が，若年性糖尿病の実態，予後及び予後と治療の関係を調査することにあることから，北海道における現状を報告し，今後全国のそれと比較してみたいと思う。

1.　対象と方法　：　対象は北海道内で，16歳未満に発症したインスリン依存性糖尿病である。毎年1月に道内各病院小児科及び糖尿病外来を行なっている内科医へのアンケート調査，サマーキャンプの参加者，小児糖尿病協会会員より症例を把握した。

2.　年間発症数の変化　：　北海道在住の16歳未満の人口は約140万人，この内6～15歳の学童は84万人であり，ほぼ一定している。1973年の年間発症数は7例，1980年のそれは26例であった。この

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

同化ホルモンとしても重要な働きを有するインスリンの絶対的乃至相対的欠乏状態である糖尿病患児では,発育,発達が障害され得ることは想像に難くないところである。
32 症例の糖尿病患児につき,この点に検討を試みた結果は下記の如くである。